

科学研究費助成事業 研究成果報告書

令和 4 年 6 月 15 日現在

機関番号：15401

研究種目：基盤研究(C) (一般)

研究期間：2017～2021

課題番号：17K02973

研究課題名(和文) 英語のフェイス侵害表現に対する許容度の国際比較と教育への応用

研究課題名(英文) Pragmatic Tolerance to Face Threatening Acts in English and its Pedagogical Application

研究代表者

深澤 清治 (Fukazawa, Seiji)

広島大学・人間社会科学研究科(教)・名誉教授

研究者番号：00144791

交付決定額(研究期間全体)：(直接経費) 3,300,000円

研究成果の概要(和文)：本研究の目的は、第二言語語用論を理論的基盤として対人間コミュニケーションにおいて相手に不快感をもたらすフェイス侵害表現のうち不平・不満表現に焦点を当て、(1)英語の不平・不満表現に対する許容度が話者の母語によって異なるのか、(2)教育的介入によって適切なフェイス侵害表現を教授できるのか、を明らかにすることであった。また、日本人や他の非英語母語話者学習者がどのように不平・不満を英語で表現するかを分析し、日本人は自分より地位が上位で社会的距離の遠い者へは不平・不満表現をあきらめる傾向が強いこと、さらに、不平・不満を構成する下位表現の出現順序が話者の母語によって異なることが明らかになった。

研究成果の学術的意義や社会的意義

本研究の学術的意義は、第二言語語用論研究において依頼や謝罪表現に比べて注目度の低いフェイス侵害表現である不平・不満表現に着目したこと、また英語母語話者と英語非母語話者との間の言語使用の違いに着目した先行研究を踏まえて、新たに英語非母語話者同士の英語による不平・不満表現の特徴を比較・分析したことにある。その結果、国際コミュニケーション場面において国際共通語としての英語を使用する際、不平・不満を例に話者の母語や文化的背景の違いが発話行為の遂行に影響を与え、異文化誤解につながる可能背のあることを具体的なデータに基づいて示唆したことに社会的意義および今後の外国語教育における教育的意義を有すると言える。

研究成果の概要(英文)：The present study focused on complaint strategies by non-native speakers of English, an under-researched field in second language pragmatics. Data were collected from different nationality groups of university-level learners of English by asking what they would say in four situations in academic contexts and were analyzed regarding the frequency of linguistic characteristics appearing in core information (head acts) and surrounding expressions (supportive moves). Furthermore, the sequential organization of complaint strategies was studied as a way of identifying culture-specific patterns of preference organization. Obtained results suggest that different L1/cultural backgrounds influence second language speech act performance. Thus, this study will be able to contribute to our understanding of the social and sequential organization of talk in cross-cultural interactions and its potential effects on intercultural miscommunication.

研究分野：第二言語語用論

キーワード：中間言語語用論 フェイス侵害行為 許容度 国際比較 異文化コミュニケーション リンガフランカとしての英語

科研費による研究は、研究者の自覚と責任において実施するものです。そのため、研究の実施や研究成果の公表等については、国の要請等に基づくものではなく、その研究成果に関する見解や責任は、研究者個人に帰属します。

1. 研究開始当初の背景

(1) 本研究に関連する国内・国外の研究動向及び位置づけ

人はコミュニケーションをとる際に、自分の行動を邪魔されたくない願望(ネガティブ・フェイス)と自分の行動が好ましく思われたい願望(ポジティブ・フェイス)をもつ。これまでの第二言語(L2)語用論能力研究や外国語教育では、ネガティブ・フェイス侵害が行われる際(「依頼」「提案」など)に用いられる丁寧な表現について、多くの研究や指導がなされてきた。一方で、友好的なコミュニケーションを阻害しうる、ポジティブ・フェイスの侵害(「不平」「不満」「苦情」など)には十分な焦点が当てられていない。また、伝統的な語用論研究では、学習者の第一言語(L1)や第二言語熟達度の違いにより、産出される表現に英語母語話者モデルとの差が見られるか否かを調査する基礎研究が主であった。近年、教育的介入により適切な表現が教授できるか否かを調査する教育的な応用研究が行われ始めたものの、未だその数は十分ではない。そこで本研究は、先行研究であまり取り上げられていない、ポジティブ・フェイス侵害表現に焦点を当て、1)その許容度がL1の違いでどのように異なるのか、2)教育的介入により、適切なポジティブ・フェイス侵害表現を教授できるか、の2点を明らかにすることにした。

(2) 着想に至った経緯、これまでの研究成果

申請者はこれまで1)英語教育の教材で使用される聞き手のネガティブ・フェイス、及び2)ポジティブ・フェイスを侵害する発話について、L1や熟達度の違いなどの言語的背景を分析する基礎研究を行ってきた。その中で、現在の日本の英語教育においては、ポジティブ・フェイス侵害表現の学習機会が乏しいことが指摘されている。たとえば検定英語教科書では多くの場合、良好な人間関係場面が提示され、不平、不満などの相手のフェイスを侵害、威嚇する可能性の表現の出現は極めてまれであり、適切なフェイス侵害表現の習得が困難であると予想される。そこで、現実世界の多様なコミュニケーション上、誤解や認識の不一致を生む可能性があるポジティブ・フェイス侵害表現についての研究及び指導が必要であると考え、本研究を着想するに至った。

2. 研究の目的

本研究の目的は、第二言語語用論を理論的基盤として、対人間コミュニケーションにおいて相手に不快感をもたらす表現(フェイス侵害表現)のうち先行研究で取り上げられることの少なかった不平・不満の表現に焦点を当て、1)表現を英語で聞いた際の許容度が話者の母語によってどのように異なるか、2)教育的介入によって適切なフェイス侵害表現を教授できるか、の2点を明らかにすることである。これにより「英語母語話者と学習者間」のみならず、「母語の異なる英語学習者間」でのリンガフランカとしての英語コミュニケーション研究における学術的・教育的成果を得ることをねらった。しかしながら、世界的なコロナ感染拡大による研究実施上の制約から、当初の研究方向、データ収集方法を軌道修正し、日本人英語学習者とタイ人英語学習者を対象にデータを収集した。その結果、これまで気質・感情といった国民性や文化の違いといったエピソード的解釈を超えて、データによって2つの集団による英語発話行為の言語語用論的特徴の背景となる、社会文化語用論的説明を特徴付けることをねらった。

3. 研究の方法

(1) 研究計画の変更

世界中でコロナ感染が拡大したことにより共同研究者との研究交流やデータ収集が困難になったため、研究計画の見直しを行い、不平・不満表現に対する学習者の許容度分析から、日本人英語学習者と外国人英語学習者を対象に、従来型の語用論発話データを収集し、その類似点、相違点を分析することとした。そして、日本人大学生のデータおよび、比較的感染拡大が鈍かったタイの大学生英語学習者のデータを収集することができたので、それをもとに分析を行った。修正研究課題は以下のとおりである。

- 1)日本人英語学習者による英語の不平・不満表現において、主要行為部(head act)と支持的部分(supportive move)にはどのような特徴があるのか。
- 2)タイ人英語学習者による英語の不平・不満表現において、主要行為部(head act)と支持的部分(supportive move)にはどのような特徴があるのか。
- 3)日本人、タイ人のそれぞれのデータに類似点・共通点があるか。もし差があるとすれば、母語による言語的要因、社会文化的要因などがどのように関係するのか。

(2) データ収集方法

データ収集のため、困難なコミュニケーション場面(「苦情を言う」)の例として4つのアカデミック場面による談話完成テスト(Discourse Completion Test)を作成し、日本およびタイ国で実施した。分析の観点として清水(2016)をもとに8つのコーディングカテゴリーを設定し、調査で得られた合計110名分の日・タイ国データを文単位に分離し、それぞれをコード化した。そのうち、8つのコード化された下位発話について出現順序づけを行い、両国データを比較・分析した。

4. 研究成果

(1) 日本人英語学習者およびタイ人英語学習者の不平・不満表現の比較

2つのグループにより産出されたデータ分析により、以下のような結果が得られた。まず、日本人データに最も特徴的なのは、苦情を言いたくなる場面で関わりを避けようとする、Bonikowska (1988)のいう表現回避行動(opt out)が高い頻度で見られることである。また、苦情を言う前に前置き表現(opening)を最初に述べる動きは、特に相手が自分より力関係の上位にある場合、それが顕著に見られた。興味深いことに、力関係が同等で、親密な関係の同級生に対しては表現回避頻度は最も低いものの、いきなり苦情から始めることはなく、前置き表現がほかの3つの場面よりもさらに多く(70%)、直接的な苦情表現をなるべく避けようとする傾向が見られた。

これに対し、タイ人データで注目すべきは、前置き表現が4場面中どれをとっても日本データよりも少ないことにある。特に友人に対しては、日本人データは70%が前置き表現のある回答であったのに対し、タイ人データではわずかに13%であった。このことは、本調査対象のタイ人グループは、前置き表現の使用が少なく、発話開始早期の段階ですぐに説明(explanation)や実際の苦情(request for repair)、たとえば友人から本を返してもらう時、いきなり“Can you return my book?”と述べており、より直接的なコミュニケーションスタイルを取っているのがわかる。一方で、タイ人データには、苦情を述べた後、相手の事情などを理解しようとするいたり・同情表現(symathy)が日本人よりも多く使われていることがわかった。

以上の結果から、両国データの類似点・共通点は次のようにまとめられる。

・不平・不満・苦情表現には一定の順序がある。両グループとも「前置き表現」「説明」「要求」のような定番表現の順序がみられた。

・不平などを言う際に、直接相手に「文句がある」という直接的な不平よりは、共通話題や一般論から間接的な不平へ移行する例が多かった。このことから、謝罪表現と同様に、苦情表現などには前置き、説明、補償要求など一連のルーチンが存在することがうかがえる。

これに対して、もっとも顕著な違いは、日本人が表現回避行動(opt out)、時には沈黙(だんまり)行動に出ることが多いことである。このことは、特に自分より目上(+P)の立場にある人に対してその傾向が強く、沈黙することで自分の葛藤を抑え込んだり、やりすごしたりする傾向を見て取ることができる。不平・不満表現は、ポジティブ・フェイスを最も脅かす可能性のある表現で、人間関係上に波風を起こさないことをよしとする社会語用論的な規制が働くのかもしれない。こうした結果は、これまでのような国民性の違いといったエピソード的な解釈を超えて、データによって2つの集団による英語発話行為の違いとともに、その背景となる発想レベルの社会文化語用論的説明を特徴付けることに役立つであろう。

(2) 今後の研究への課題

本研究の成果に基づく課題は次の2点である。第一に、これからは英語だけではなくいろいろな言語で、第二言語語用論研究の視座を確立する必要がある。当分の間は、英語という第二言語を使用する学習者が各々の母語のもつ社会文化語用論的規制をどのように意識し、異なる文化規範を持つ人々とどのようにコミュニケーション上の折り合いを付けていくのか、異文化コミュニケーションにおける喫緊の問題解決につながる新たな研究の導出が期待される。

第二に、不平・不満・苦情研究に新たな展開が期待される。これまでの研究は不平を言う側の発話を分析するものがほとんどであった。つまり、適切なコミュニケーション方略として効果的に不平・不満の気持ちを伝えて、相手からの補償や謝罪を引き出す方略の学習あるいは指導のための研究であった。その一方、苦情を言われたらどのように対応するか、沈黙や笑顔で一時的にやりすごすのではなく、不愉快なコミュニケーション場面をことばでどのように乗り切るか、などは未開拓の分野である。異文化コミュニケーション場面においては自他の文化差、衝突の葛藤により、不合理、不公平と思われる場面・状況に遭遇することがある。日本においても将来の他民族社会化する可能性を鑑みて、これら一連の語用論研究特に intercultural pragmatics は、喫緊の問題解決とともに、将来の異文化理解、異文化コミュニケーション教育に大いに役立つことであろう。

5. 主な発表論文等

〔雑誌論文〕 計2件（うち査読付論文 2件 / うち国際共著 0件 / うちオープンアクセス 0件）

1. 著者名 Yamauchi, Y., Fukazawa, S., Kida, S., & Umeki, R.	4. 巻 25
2. 論文標題 Sequential organization of L2 complaint strategies by Japanese and Thai learners of English.	5. 発行年 2022年
3. 雑誌名 Hiroshima Studies in Language and Language Education	6. 最初と最後の頁 77-90
掲載論文のDOI (デジタルオブジェクト識別子) なし	査読の有無 有
オープンアクセス オープンアクセスではない、又はオープンアクセスが困難	国際共著 -

1. 著者名 Fukazawa Seiji, Kida Shusaku	4. 巻 1
2. 論文標題 Second language pragmatic attrition after studying abroad	5. 発行年 2019年
3. 雑誌名 Applied Pragmatics	6. 最初と最後の頁 184 ~ 210
掲載論文のDOI (デジタルオブジェクト識別子) 10.1075/ap.19005.fuk	査読の有無 有
オープンアクセス オープンアクセスではない、又はオープンアクセスが困難	国際共著 -

〔学会発表〕 計4件（うち招待講演 1件 / うち国際学会 3件）

1. 発表者名 Seiji Fukazawa, Shusaku Kida Yuka Yamauchi, Riko Umeki
2. 発表標題 A comparative study of L2 complaints by Japanese and Thai learners of English
3. 学会等名 APLX 2019 International Conference on Applied Linguistics (国際学会)
4. 発表年 2019年

1. 発表者名 Seiji Fukazawa, Shusaku Kida, Yuka Yamauchi, Jing Wang, and Riko Umeki
2. 発表標題 A Comparative Study on Pragmatic Appropriateness Judgement of Speech Acts between Japanese and Chinese Learners of English
3. 学会等名 The Teaching and Learning L2 Pragmatic Conference (国際学会)
4. 発表年 2018年

1. 発表者名 深澤清治
2. 発表標題 異文化を越えて心をつなぐことばー語用論からの示唆
3. 学会等名 子ども学研究会（招待講演）
4. 発表年 2018年

1. 発表者名 Riko Umeki & Seiji Fukazawa
2. 発表標題 The Speech Act Realization of Complaints in L1 and L2 by Japanese Learners of English
3. 学会等名 15th International Pragmatics Conference（国際学会）
4. 発表年 2017年

〔図書〕 計1件

1. 著者名 Jim Ronald, Seiji Fukazawa, et al.	4. 発行年 2021年
2. 出版社 JALT Pragmatics SIG	5. 総ページ数 210
3. 書名 Pragmatics Undercover: The Search for Natural Talk in EFL.	

〔産業財産権〕

〔その他〕

-

6. 研究組織

	氏名 (ローマ字氏名) (研究者番号)	所属研究機関・部局・職 (機関番号)	備考
研究 分担者	鬼田 崇作 (KIDA SHUSAKU) (00611807)	同志社大学・文学部・准教授 (34310)	

6. 研究組織（つづき）

	氏名 (ローマ字氏名) (研究者番号)	所属研究機関・部局・職 (機関番号)	備考
研究分担者	山内 優佳 (YAMAUCHI YUKA) (40781365)	広島大学・外国語教育研究センター・准教授 (15401)	

7. 科研費を使用して開催した国際研究集会

〔国際研究集会〕 計0件

8. 本研究に関連して実施した国際共同研究の実施状況

共同研究相手国	相手方研究機関			
タイ	King Mongkut's University of Technology			
中国	Xi'an International Studies University			